
援助する側のメリットとは？

森 宣 (Hiromu Mori)

大分大学医学部放射線医学講座
大分県JICA派遣専門家連絡会会長



先日5回国際医療保健フォーラムが大分大学医学部で開催された。本会は国際協力を勉強する医学部学生のサークルHORIZONによって主催されている。今年度最初のフォーラムである。通常はまず夏前に一回開催する予定なのだが、今回はそれができなかった。国際協力で高名な（医学部学生でも知っているのも日本の中では知られているのであろう）某N氏に講演を依頼したところ講演料として30万円（交通宿泊費等は別）を要求された。主催が学生なのですがと説明しても額は変わらず、学生のサークルとしては諦めざるを得なかったというのが経緯である。学生相手なので講演料は不要、手弁当で大分へ行きます、と快諾してくれた昨年までの講演者とは異質なドライな対応であった。

このフォーラムでは、本郷哲央先生（大分大学医学部放射線医学講座）に「ドミニカ共和国での国際医療協力の実績と今後について」、谷保茂樹氏（株式会社ティーエーネットワーク）に「官民協力での国際医療協力の展開について」を講演していただいた。医学部学生はJICA、ODAという略語は知っているのかなと心配していたが、講演後に学生から質問が多くなされて爽りある会であった。過去2年は、個人ないし個人主体のグループの国際協力のありかたを学んでいたのも、国家と国家間の組織的な規模の大きい国際協力のありかた、医学部としての

関わり方、医師・医学研究者としての関わり方を知ってほしくてこの2つの講演を推薦した次第である。最近では公募型のプロジェクトが通常となっているが、そのプロセスは一体どうなっているのかという主題で谷保氏に官民協力での国際医療協力について講演していただいた。出席者から多くの質問が寄せられたが、その中でひとときわ私の耳に残る鋭い質問があった。

「援助を受ける国には当然メリットがあるでしょうが、間に立つコンサルタント企業と援助する側のメリットは何なのでしょう、お教えください。」

援助する側のメリット？ ……欧米諸国は、国際協力においては自国の製品のマーケットを広げる事と国際社会でのステータスを築くという明確な目的をもっている。本邦では、最近「日本の優れた医療システムを他国へ移植して日本の製品の市場を広げる」というアベノミクス一色になっているが、つい数年前までは「援助しても日本製品を使ってはならない、あるいはなるべく使わないように」というのが本邦の国際医療協力の姿勢であった。日本の変貌に驚きながら、この「欧米化」が援助する側のメリットなのかどうか………確かにメリットと言わざるを得ないが、これがすべてなのだろうか？ と考え込んでしまった。

2011年の東北大地震・津波被害のおり、日本から国際援助を受けたことのある多くの国から無数の励ましの手紙が政府に寄せられ、日本の国際協力の価値が見直され、それまで減少の一途であったODAが一挙に増額されたとされている。その価値とはアベノミクス以前の日本の直接の利益を求めない国際協力のありかたに対して世界中が認めたものであろう。特に意識せず日本というブランド作りには成功していたのだと思う。

このようなことを思いながら振り返ってみると、個人的には何ら「与える側のメリット」について考えていなかったことに気付いた。与える側のメリットとは、私にとってそれこそ全く欠損している概念であった。もっとよく考えてみると、私自身が国際協力の任にあるときも、多くの医師、技師を派遣するときも、「視野が広がれば良し」と考えていたし、公にも口にしていた。それ以上でもそれ以下でもなく、日本で医学部の学生に教える、研修医に教える、あるいは学会にて勉強したい方々に対して教える、自分の知識、技術を教え伝えるのと変わらない姿勢でいたことに気付いた。もっとドライに自身のメリット・利益を考えないといけなかったのだろうか？

もっと私が持っている材料を分析してみよう。1989年から今に至る約26年間に3つの日本の医療技術プロジェクトがドミニカ共和国で行われ、大分大学医学部からのべ約200人におよぶ医師、技師、看護師が専門家として投入され、約50人のドミニカ共和国の医師、技師、看護師、運営事務職の方々が大分大学医学部に研修した。無償資金協力として、2つの医療センターが隣り合って建設され、ドミニカ共和国での代表的な高度医療施設となった。投入された金額といい専門家の数といい、振り返ると壮大な国と国との関わりであった。私はその二つ目のプロジェクトから関わっているわ

けだが、何をエンドポイントと考え、そのために我々はどうあらねばならないと考えていたのだろうか？

そう、エンドポイントは支援を受ける側の自立であり、そのためには教育システムと経済的自立システムの構築が必要であった。そしてそのシステムは継続できるものでなければならなかった。国が他国の教育システムに介入することはできないのは当然なので、徹底的に人材を育てて、育った人材が国の内側から制度などを変えることができれば幸いと思って指導していた。「あなたたちはリーダーとなるべき人たちであり、あなた達が次世代のリーダーを育てなければならぬ」と口を酸っぱくして繰り返していたものである。ただ、今回振り返ってみてわかったことは、教える側の学術レベルが学生・研修医に教えるレベルで良いかということではなく、先進国のなかでも高いレベルでないと途上国にも教えることはできないのではないかとこの事である。医学、医療の進歩の速度は速く、10年ひと昔ではなく2、3年で知識、技術は古いものとなる例は枚挙にいとまはない。支援する側が常に世界のトップレベルであるように努力している姿勢こそが、支援される側が学ぶ最大の財産であると思うし、教える側に立って初めて人間は大きく成長するものである。

でも26年間を振り返って反省すべき点はないわけではない。3つめの医療技術プロジェクトを終えた後の医師、技師等の研修（再研修）がなされていないこと、そのための教育研究経費として経常的に予算の20-30%くらいは支出することを指導していなかったことである。研修先として日本にこだわらずに、同言語国（たとえばスペイン）に求めておくべきだった。

さて、こう考えてみると、支援する側のメリットを特に考えていなくとも良いではないかと思う。確かに日本製品のマーケットを広げると

いうことは意識しないといけないことであろうが、アベノミクスはツールのひとつと考えても良さそうである。実力ある者が、もっと高いレベルを目指しながら学びたい若い世代に教えるという、医学の世界では当然の習わしに沿っていれば自然と国際社会でのステータスは醸成されそうだが、読者はいかが思われるだろうか。学生さんの「支援する側のメリットは何か？」という問いには、いささか甘いと言われるだろうし凡庸かもしれないが、「視野が広がるだけでも財産になるよ」と答えることにしよう。学生に30万円の講演料を要求するよりは良いだろう。

「ニカラグア国農牧分野職業訓練改善プロジェクト」に 取り組んでいます

中 村 進

ニカラグア国
農牧分野職業訓練改善プロジェクト
チーフアドバイザー／畜産



専門家として派遣されるまでの経緯

県を退職後、農業大学の嘱託で畜産を教えていたとき、畜産技術協会からJICAのプロジェクトの話がありました。全国の農大に問い合わせたものの、希望者がいなかったようです。

派遣の条件は、農業普及又は農業高校か農業大学校での教師経験者ということで、私の条件にぴったりでした。

長年県に勤め、先輩や周囲の人たちから教えられ得た私の経験と知識が生かせる場所があれば、どこでも行ってみたいと考えていましたので、この話しに大変興味を覚えました。最終的には、義父母の高齢の事もありましたが、周囲が押ししてくれたので参加することにしました。

ニカラグアという国

ニカラグアは、中米の最貧国の一つです。国土は日本の1/3程度で人口約600万人です。

気候はカリブ海側の熱帯雨林と太平洋側のサバンナ気候に分かれ、日平均気温は23℃～30℃程度で、降水量は1500mm～3000mm/年で、主な農産物は、コーヒー、牛肉、サトウキビ（砂糖）があります。

日本企業はレオン市の矢崎総業だけで、ビジネスチャンスのあるこの国にもっと進出して欲しいと思います。

ニカラグアでなぜこのプロジェクトに取り組むのか

ニカラグアにおける農業関連産業のGDPは、全GDPの30%を占めるとされ、同国の重要な産業の一つです。農村地域では、今でも貧困と飢えに苦しんでいる人が多く、国家プロジェクトとして「飢餓ゼロ」に取り組んでいます。その重要な対策としての農村開発プログラムでは、特に若年層の職業教育が必要で重要であるとされています。

この国の農業教育は、全国14の農業技術センターで行われていて、そこで使われるテキストは、内容的に時代にあってなく、文字が多く、学生が理解しにくいものです。また、教師にとっても内容を補うために多くの労力を要している状況なうえ、専門外の教科も担当するので、内容を十分理解出来てない状態で教壇に立つ



授業中（学生はノートを取るので一生懸命）



農牧技術センターの設置場所

こともあります。

こうした農牧分野の職業教育上の課題を解決するため、ニカラグア社会の実態に応じた内容のテキストに改訂するプロジェクトに取り組んでいます。

プロジェクトの概要

具体的には、農牧課程で使っている技術教科のテキスト（21教科）を時代にマッチさせ、図表等を挿入してわかりやすいテキストに改訂し、新たに加えられた技術内容について教師が教えられるように指導することです。このようにこのプロジェクトは、新技術を移転するプロジェクトではありません。

テキスト改訂作業は、国の諸機関や大学、民間などの外部の人の意見を取り入れて指導要領を見直し、それに基づいてテキストの執筆をそれぞれの専門家に分担して行っています。こうした外部専門家の協力を得てテキストの改訂作業をするのは、この国では初めてのこのようです。

このプロジェクトは、2013年9月に開始され、5年間で予定されています。テキスト改訂に重きがあり、大きな機材供与や新技術の導入は基本的に考えていないので、予算的には比較的小さいと思われます。

スタッフは、日本人専門家（チーフアドバイザー／畜産、業務調整／農業）2名、現地スタッ

フはアシスタント4名（含絵描き兼編集担当）と運転手1名です。

カウンターパートは、農牧技術センターを管轄する部署（テキストの作成部署、教員要請部署、農牧技術センター指導部署）の部長及び課長ですが、具体的なテキスト改訂作業は各課の専門員が対応しています。（プロジェクトは複数の課に関係している事もあり、スタッフだけの部屋で業務を行っています。）



カカオ園



土壌害虫の密度調査実習



乳牛の飼育状況

ニカラグアで驚いたこと

- ・中米の最貧国といいながらネット環境はかなり良いのには驚きました。FAXはないが、多くのホテルや食堂ではWi-Fiが使えます。但しスピードは遅いです。
- ・明日の天気を心配することはありません。降雨は、雨季でも午後の2～3時間だけです。
- ・スーパーに行けば日本にある物はほとんど手に入ります。ただし、満足できるかどうかは本人次第です。
- ・車の事故が非常に多いです（毎日事故現場に遭遇します）。原因は、ロータリー方式の交差点と交通マナーの悪さによると思われます。車の車検制度がないのも一因でしょう。私の車も追突され、中破しました。

短期大学における「国際協力」の教育と実践

玉 井 昇

大分県立芸術文化短期大学国際総合学科
准教授

はじめに

大分県立芸術文化短期大学は、音楽や美術など、県内でも芸術や文化の印象が強い短大です。時々、私も「声楽の先生ですか？」とか「陶芸の方ですか？」とか聞かれますが、国際総合という学科に所属しています。この国際総合学科では、国際協力や国際交流に対する視野を広げ、自ら主体的に関わっていくことを教育目的の一つに据えた教育を実施しています。ここでは、そんな教育活動の一端をご報告させていただきます。

国際総合学科とカリキュラム

まず、その名の通り本学は芸術のイメージが強いのですが、短大レベルで純粋な芸術を学んでいる学生は、定員総数1学年340名に対して、90名（美術科美術専攻25名＋音楽科65名）であり、全体の27パーセントほどに過ぎないのです。逆に、全体の約60パーセント近くの学生が、国際総合と情報コミュニケーション学科に所属し、ボランティアやサービスラーニングなどの実践的な教育活動に参加しています。その中の半数が国際総合学科の学生（定員100名）です。

さて、その国際総合学科では、「アドミッション・ポリシー（＝どういう学生に入学してほしいか）」の一つを、「国際交流や社会活動に関心があり、実際に参加したい人」として



国際ボランティア論の講義風景

います。また、「ラーニング・アウトカム（＝学修成果）」の一つに、「グローバルな行動力」の獲得を掲げています。そうした学修成果を得るための実践的科目として、「国際ボランティア論」、「海外ボランティア実習」、「サービスラーニング」、「海外語学実習」、「国際理解教育論」などが設置されています。その中でも、「国際ボランティア論」は、学科の基幹科目と位置づけ、1年次前期の必修科目として全員に受講してもらっています。

「国際ボランティア論」の授業内容

この「国際ボランティア論」では、「身近に



外部講演：緑の大地の会
寺尾理事長による講演

できる国際的な協力や交流」があることに気づき、「自らの判断で主体的に参加・行動する姿勢」を養うことを目的にしています。つまり、途上国などの海外のみで行われているような、自分とはほとんど無関係な活動だと考えていた学生たちに、そうではないことを理解してもらい、自分たちに何ができるのかを考えてもらうようにしています。そして、県内にも世界を見すえて活動する諸団体がいることを紹介しながら、その活動に参加していく「きっかけ」づくりを行っています。

授業内容の構成は、1) 導入教育、2) 関係諸団体による活動紹介、3) 活動への実践的参加です。まず、1) の導入教育では、田中治彦（著）『援助する前に考えよう』（開発教育協会）に掲載されているワークショップ教材を活用し、国際ボランティアの意義と目的、参加する場合の留意点について、学生に授業参加してもらいながら考えてもらっています。例えば、「もしも旅先で寄付を求める看板を見かけたら、あなたはどのようにするか？」などをシュミレーションしてもらい、その行動の結果や影響を検討しています。

2) 次に、学生たちが国際ボランティア活動に対する理解や参加意欲を高めたところで、

世界を見すえ、県内を中心に活動されている諸団体の方々を講師としてお招きしています。これまで、JICA九州、緑の大地の会、おおいた国際交流プラザ、大分市文化国際課国際化推進室、シャンティ国際ボランティア会、Can-do、日本ケニア親善協会、大分県フィリピン友好協会、ヒップファミリークラブなどにご講演いただきました。内容は、設立の趣旨、活動の目的や意義、具体的な活動内容です。また、本学生にもボランティア参加を呼び掛けてもらい、その留意点なども説明してもらっています。

学生による国際ボランティア活動への参加実践

その結果、関連諸団体が主催する活動に、学生たちがボランティアとして主体的に参加するようになっていきます。例えば、本学の正規授業科目である「海外ボランティア実習」をはじめ、NPO法人緑の大地の会主催の「ボルネオ植林活動」など、海外へ渡航する活動です。さらに、「大分国際車いすマラソン」、「おおいたワールドフェスタ」、「国際七夕フェスタ」、「春節祭 IN おおいた」など、県内で行われる国際的な関係イベントにも、ボランティアとして数多くの学生が参加するようになっていきます。さらに、学生たちの自発的な試みも見られ、本学の学園祭である「芸短祭」でフェアトレード模擬店なども出るようになりました。また、日常生活の中でも、「フェアトレード商品を買ってみた」とか、「エコバックやマイ箸を持ち歩くようになった」というように、国際協力に対する学生の意識も高まっています。このため、参加実績などの数値を把握するのが徐々に困難になってきており、ある意味その必要のないような成果を上げつつあります。こうして、少しずつでも、「世界を見すえ、国籍を越えた仲間と地域で活動する人材」が育っていかればと願っています。



緑の大地の会主催
「ボルネオ植林活動」への参加



おおいた国際交流プラザによる
「国際七夕フェスタ」にて



「大分国際車いすマラソン」
通訳ボランティア補助



「おおいたワールドフェスタ」にて
フェアトレードショップを出店

隊員時代を振り返って

佐 保 好 信

派遣国：フィリピン
隊 次：平成22年度4次隊
派遣期間：2011年3月～2013年3月
職 種：服飾



■「フィリピンの田舎町での生活」

青年海外協力隊として、レイテ島のレイテ町にあるレイテ農業職業訓練学校に派遣されました。日本でいうと農業高校のような学校です。レイテという名前を聞いて思い浮かぶのは、第二次世界大戦時に激戦地だったということ。抗日ゲリラが多くいた島。かつては日本人と言うと、石を投げつけられていた時代もあったそうです。ですから派遣前は、受け入れてくれるのか不安でした。実際に行ってみると、皆日本という国、日本人が好きだと言ってくれました。彼らの生活に必要な不可欠のバイクもまた、日本のメーカーが人気です。

フィリピンの公用語はタガログ語と英語の2つですが、島国であるフィリピンは、現代でも80種類以上の言語が存在します。そのうちの1つのワライワライ語という、聞いたことのない言語をレイテ町の人々は話します。同じ島でも南部ではセブアノ語が話されます。レイテ町はヤシの木に囲まれた小さな町で、村落隊員（現在のコミュニティ開発隊員）が派遣された町よりも田舎でした。ですから、インターネットやレストランがありません。1人暮らしの物件がないので、ホームステイという選択肢のみ。どのような家に住んでいたかと言いますと、なんと町長の家ホームステイしていました。まわりは竹でできた高床式住居のような家が多い中、町長の家はお金持ちなので大豪邸。

使わせてもらった部屋も、実家の部屋の3倍以上の広さでした。食べ物はというと、何を食べても美味しい。肉、魚、野菜、どの食材も新鮮。それから味付けも醤油ベースが多いので、日本人の口に合うものばかりです。お気に入りには、酸っぱいシニガンスープとレチョン（豚の丸焼き）です。



写真① ご馳走のレチョン（豚の丸焼き）



写真② フィリピンの美しい海

それからフィリピンの海は透明度が高く、美しいビーチがたくさんあります。嫌なことがあった時は、よく海を眺めに行っていました。

■「要請と活動内容」

活動内容は、服飾コースの教師に紳士服の知識、技術を向上させるというものでした。服飾コースの先生は1人だけ。この先生がカウンターパートとなるのですが、困ったことにまったく喋らない寡黙な方。外国人の私に対して、話さないということではなく、同僚の先生に対しても同じ。そして活動が始まってすぐに、体調不良でカウンターパートが学校に来なくなりました。はじめは2週間だけといていたのですが、気付けば2カ月が経っていました。言葉も分からない、学校のカリキュラムも分からない状態で、その間1人で3学年、計109名の生徒を受け持っていました。精神的においやられました。他の先生が助けてくれたので、何とか指導することが出来ました。洋裁の基礎ということで、デザイン、パターン・メーキング、裁断、縫製、仕上げを教えていたのですが。面白い授業も取り入れたいと思い、理科の先生の協力で、

リサイクルの授業を行いました。飴玉やお菓子の袋、ジュースのパック、小麦粉の布袋、ヤシの実の皮など、ゴミを使って衣装を作りました。最後にファッションショーを開催したのですが、とても盛り上がりました。

午後5時を過ぎると、学校専属の警備員、大工のおじさんが「飲もう」とよく誘ってくれました。ココナッツで作られたお酒『TUBA』をよく飲んでいたので、レイテ島の思い出の味です。

■「任期を終えて」

青年海外協力隊の任期を終えて帰国後、フィリピンで仕事を見つけて戻りました。2年間というのは短く、まだまだ知らないことが多い。もっとこの国のことを知りたいという思いから、フィリピンで就職をしました。日本向けの商品をつくる縫製工場の品質管理をしていたのですが、忙しく休みはほとんどありませんでした。ですが楽しく仕事をしていたのは、フィリピン人スタッフとの関係性が良かったからです。ワライワライ語ではなく、公用語の1つあるタガログ語の勉強にもなりました。マニラ郊外の町に工場



写真③ リサイクル・ファッションショーの様子



写真④ 高校生実体験プログラムの様子

があり、外国人を見掛けないエリアでした。既にこのような環境には慣れていたので、協力隊の経験がすぐに活きた結果だと思っています。

■「JICAデスク大分に着任して」

海外でのボランティア活動、就職を経て、前任の渡辺さんよりバトンを託され、現在大分県の国際協力推進員として働いています。県内の小学校、中学校、高校、大学、専門学校と、様々な場所に向向いて講演をさせて頂く機会が多く、少しでも若い方々に海外へ関心を持つキッカケになって頂けたらと思っています。

外から日本を見つめなおす瞬間というのも、大事な経験を通して感じています。

微力ではありますが、大分県の国際協力、国際理解協力を盛り上げたいと思っています。どうぞ皆様のお力をお貸しいただければ幸甚にございます。



写真⑤ 民族衣装ファッションショーの様子

フランス 本物のオリーブオイル探しの旅 ～生産者の顔が見えるオリーブオイルの直輸入に至るまで～

高野悦子

株式会社 清風庵
2015年11月11日

1991～1992年、20代だった私はフランス料理・フランス菓子を学ぶために留学し、フランスに滞在していたことがあった。2012年冬、「前はいつだったのだろうか。」と思うくらい久しぶりに、私は渡仏した。その当時お世話になったフランス人家族の方々に会うことができた。中でも101歳を超えるマリアおばあちゃんはお元気で、私の事をよく覚えていたことに、私は驚かされた。「早く迎えが来ないかなー？ 待っているのだけど。」と冗談まで。高齢にも関わらず元気なマリアおばあちゃんは、食欲もあるのでどんな食生活をして来たのか一番興味があり、本人に直接お話を伺った。「オリーブ栽培をしている農家に生まれ、子供の頃からずっとオリーブオイルをよく食べているのよ。」「後はみかんが大好き。マドレーヌもね。」との事だった。私はオリーブが健康に良いのは知っていたつもりだったが、マリアさんに再会したことで、以前にまして興味深い食材だと思わされた。

九州で最初のハーブマスターである母の影響もあり、私は30年以上前からハーブに関する経験や知識は豊富だった。2012年にメディカルハーブセラピストの資格取得のため、ハーブに関する勉強を再度始めていた。私は特に食文化や食材にとっても興味があり、健康になれる食材を少しでも普通の食生活に取り入れられるように気をつけていた。オリーブもハーブの一つと

とらえており、オリーブの葉やオリーブオイルが良いと言う事も知っていた。マリアおばあちゃんの健康な様子を目にした時、オリーブについてもっと知識を得たいと思い、少しずつ情報を探し始めた。オリーブについて調べているうちに、日本人がオリーブオイルを食生活に取り入れるには、いくつかの課題がある事が分かって来た。その課題を解決するには、今まで以上にたくさんのオリーブオイルを食べてみる事が必要だと感じた。そんな折、知人からたくさんのオイルを味わう事が出来るオリーブオイルソムリエの資格情報を得た。そしてオリーブオイルソムリエの資格を取得した。

資格を取得した後も、私は課題解決を模索していた。大分県で生まれ育った私は、その時すでに私なりの方法で大分県産のカボスやユズで香味オリーブオイルを作りたいとも考えていた。課題を克服するために、国内に輸入されているオイルを使って、オリーブオイルに合う和食の試作を繰り返した。しかし、いつも同じ壁にぶつかった。国内にあるオイルを使って試作する中で、私は一つの共通点を見つけた。この共通点がある限り、私は自分の舌に合うオイルを日本で見つける事は難しいと感じた。そこで、和食に合うオイルを自分で見つけるという事が私の課題となった。

オリーブについて学びを深めて行く中で、スペインやイタリアに隣接するフランスのオリーブ

オイルは日本国内にはあまり輸入されていない事を知った。また輸入国となっている製品でも生産主要国から輸入し、最終工程で瓶詰した国の国名が表記されている事には一番驚いた。たくさんの課題にぶつかり自分で「本物のオリーブオイルを探そう」と考えた。料理を学ぶためにフランスに住んでいた頃に美味しかったフランス産のオイルを思い出し、2013年春から数カ月、フランスのオリーブオイルに関する文献を片端から探し始めた。まず、フランスには227社のオリーブ生産者がいる事がわかった。その中から1つずつ自分の目指すオリーブオイルを作っている生産者を探し始めた。オリーブオイルを選ぶときのポイントを私なりの基準でリスト化していたので、そのリストに添って調べていった。

それから3ヶ月ほど経過した頃、どうしても訪ねて見たいと思う生産者が1つ見つかった。早速大分から、フランスの訪ねて見たいと思った生産者へ連絡をしてみたが、繋らなかつた。「諦めたほうが良いのか。」とも考えた。しかし、そのオリーブオイルへの思いが強く、何度も連絡を試みた。やっと生産者との連絡が取れた時、「私はどうしてもあなたの所のオリーブオイルを

食べてみたいのですが、日本に送っていただけますか？ 若しくは直接お伺いする事が出来ますか？」と、尋ねた。生産者の方は「いつでもムーラン（搾油工場）へどうぞ。」という返事だった。それから私はすぐに渡仏チケットを手配した。

2013年9月22日、TGV列車でパリからエキサン・プロヴァンスに行き、バスで移動した後、在来線で生産者のムーランがある最寄り駅に到着した。パリを出発した時は、私にとって夢にまで見たオリーブオイル生産地の訪問なので心が躍るような思いだった。しかし、生産者のいる最寄り駅に段々近づくに従って、「何ヵ月にも渡ってオリーブオイルに関する勉強や料理の試作を繰り返し、自分で本物のオリーブオイルを探し出そうと決心して調べて厳選した生産者だが、じかに見て確認しても私の探しているオリーブオイルではないかもしれない。」という、不安と期待とが縋り交ぜになっていた。

列車を降りると、駅に生産者のフレデリック・ピナテル氏が迎えに来てくれていた。「あなたが悦子さんですか？」「はい」と、短い挨拶だった。何のつても無く紹介者も無く、約9000km以上離れた日本から訪ねて来た私を、彼が不思議そう



樹齢500年以上で、根は1000年を超えるオリーブの木
(ドメヌ・サルヴァートル社園内)



生産者 フレデリック・ピナテル氏



収穫されたオリーブ

な顔で見ていた事を今でも鮮明に思い出す。限られた時間の中で、周辺環境・オリーブ園・搾油工場などを次々と案内してもらい、いよいよ最終段階のオリーブオイルのテイスティング。オリーブ園～搾油工場、工場の清潔さ等、最高の設計だと感じた。ピナテル氏の生産しているオリーブオイルを一種類ずつ、そして一口ずつ口に含んでテイスティングしていった。感嘆をあげるほどの美味しさだった。「私は、見つけた。これなら和食にも合う。これを日本で毎日食べたい。」と瞬時に思った。「これは本物だ。」と、思わされる瞬間でもあった。ピナテル氏に、彼が生産しているオリーブオイルを気に入ったことを伝えるとともに日本に輸入したい意向を伝えた。「万が一日本でたくさん出るようになったらどうしますか?」「5年待ってください。」ピナテル氏の返答にオリーブ栽培に対する誠実さを、尚一層心に深く刻ませてくれた。私が彼を訪ねるために準備したのは日本地図、大分県地図、居住地境界の地図、そしてオリーブオイルソムリエのディプロム、フランス料理・フランス菓子学校のル・コルドンブルー優秀賞のディプロムのみだった。彼は私が準備した物や私自身を、その時どのように思ったのだろう。

日本に戻り、早速、輸入する方法を調べ、私の気に入ったオイルを輸入してくれる日本の商社を探すには意外に大変なことが分かった。しかし、「あのオリーブオイルを毎日食べたい。」少しでも

両親が元気で長生き出来るのであればとも。色々な思いが日々募り、自分で輸入する方法を模索し始めた。同年11月のオリーブオイルの初搾りの時期に再び生産者を訪ねた。諸手続きを済ませ、幸運にも2014年春より輸入する手筈となった。課題解決のために、ずっと考えていたカボスやユズの香味オリーブオイルも、数々の問題に遭遇しながらも実現する運びとなっていった。

2014年に私がプロデュースした、「大分県産かぼす香味エクストラヴァージンオリーブ



2014年植樹されたオリーブの新苗

オイル」・「大分県産ゆず香味エクストラヴァージンオリーブオイル」は、2015年国際オリーブオイルコンクール（日本）で金賞を受賞した。ドメヌ・サルヴァートル社のエクストラヴァージンオリーブオイルも金賞で合計4個の金賞だった。和食に合うオリーブオイルを見つけるとい私の課題は解決に至り、金賞を受賞した事で多くの方々に和食と一緒にオリーブオイルを味わって頂けるという喜びを得る事ができた。また、幸運にもフランスで同時発売に至った。フランスでも大分県産のカボスやユズが受け入れられたことにも喜びを感じている。フランスに限らず大分県内でも生産者を直接訪ね、素材を選ぶときの私なりの基準が守られているか繰り返しチェックしている。多くの方々に助けられ、自分が納得できるオリーブオイルを毎日食べる事ができるようになった。お陰で毎日元気で

健康的な生活を送る事が出来ている気がする。

大分県の生産者とフランスの生産者が繋がる独自スタイルで、少しでも農業に貢献できるパイプ役に、微力ではあるがなっていく夢を自分の歩調で進みたいと考えている。「生産者には購入者の顔が、購入者には生産者の顔が見える」ように、生産者と話し合い、協力しながら自分の基準にあった生産したものを提供していきたいと思う。まだまだ限られた生産量のドメヌ・サルヴァートル社であるが、昨年新苗を植樹し始めた。オリーブ果実が実るまでには5年の歳月が必要で、その果実が実るまで同じ速度で少しずつ階段をのぼり、自分なりに成長して行きたいと思う。

そして、大きなきっかけになった長生きをしたマリアおばあちゃんやお世話になった方々、そして自分の家族に大変感謝している日々。



大分県産かぼす・ゆず香味オリーブオイル

ごみの中で見えたもの

佐藤友紀

派遣国： Bangladesh
任地： 首都 ダッカ
隊次： 平成24年度2次隊
派遣期間： 2012年9月～2014年9月
職種： 環境教育



■「街をきれいにしているのは誰？」

Bangladesh の首都ダッカでは人口増加による家庭ごみの収集が間に合わず、悪臭が至る所に漂っていた。配属先のダッカ北市役所廃棄物管理局では365日休みなく、路上や家庭から出たごみを回収する行政サービスを行っている。

夜明け前から市の清掃員が箒で路上のごみを集め、手押し車に乗せて中間地点へと運んでいく。彼らは市の職員だが、給与も低く、子どもを学校に行かせてやれない等の問題を抱えている。「ごみを扱う仕事はみっともない」という周りからの目線もあり、社会的に認めてもらえない事を感じた。彼らを応援したい、でもどう

すればいいか？ から始まった Bangladesh での活動だった。



写真① ダッカでのごみ収集の様子



写真② 市役所の清掃員たち



写真③ 日本からの収集車の様子を見るツアー参加者たち

■「ごみツアーで市役所の仕事をPR」

派遣され1年が経った頃、ダッカ在住の日本人やスタディーツアーで訪れる大学生や日本企業に向けて、ごみツアーを行ってほしいとの依頼が来るようになった。

実はダッカでは、JICAの廃棄物支援が10年以上に渡って進められ、市役所スタッフの研修やトレーニング、最終処分場の整備やごみ収集車の無償提供を行ってきた。

ツアーの中で、日本の援助が現場で活かされている事と、日々の清掃員の仕事ぶりを多くの日本人にアピールする機会を設ける事にした。参加者にはごみ山の臭いが衝撃的だった様で、5分も経たずにバスに戻ってしまう人もいたが、このツアーでは自らごみの現場を体験してもらう事で、途上国をきっかけに日本のごみ問題にも目を向けてほしいとのメッセージも込められている。

清掃員たちも自分たちが注目されるとの事もあって、いつもより誇らしげに仕事をしていたのが印象的だった。1人の清掃員が参加者のために自腹でジュースを買ってきてくれた事もあり、イスラム教の教えである「旅人にはもてなしを」の精神に皆感動していた。

■「2年間を振り返って」

見栄っ張りでおせっかいだがどこか憎めないバングラの人々に助けられながら過ごした2年間は、一生物の財産になった。また屋台で砂糖とミルクがたっぷり入った熱々の紅茶を飲みながら、現地の人たちと世間話ができる日を楽しみにしている。



写真④ 現地の人とティータイム

厚生労働省平成27年度医療技術等国際展開推進事業 「カンボジア国における放射線デジタル技術普及事業」 に参加して

高 司 亮

大分大学医学部放射線医学講座

はじめに

この夏、私はカンボジアで行われた厚生労働省平成27年度医療技術等国際展開推進事業「カンボジア国における放射線デジタル技術普及事業」の現地研修に参加してきました。当講座の森教授から、「カンボジアで画像診断のデジタル化推進に関するプロジェクトへ参加してみないか」と声をかけられたのは6月頃であったかと記憶しています。当初は「地雷や不発弾は大丈夫であろうか」とか、「果たしてインターネットは繋がるだろうか」とか、「衛生面は問題ないのか、食事や飲水は大丈夫だろうか」であるとか、正直なところ不安に感じる事が多かったのですが、「このような国際協力に参加することは君にとって貴重な経験となり、視野を広げることができる」との森教授の一言に後押しされ、プロジェクトへの参加を決意しました。本稿では私が参加してきた「カンボジア国における放射線デジタル技術普及事業」の概略や、プロジェクトに参加しての感想などを述べたいと思います。

1. カンボジア国の概略と実際に訪れた際の印象

カンボジアは、ベトナム、タイ、ラオスと国境を接し、東南アジアのインドシナ半島東南部に位置する立憲君主制国家です。

1970年にカンボジア王国が倒れてから勃発したカンボジア内戦を経て、1993年に誕生しました。ASEAN加盟国であり、人口は1,513万人、首都はプノンペンで、国の通貨はリエルですが、観光地ではUSドルが通用します。日本との時差は2時間程で、国民の90%はクメール人という民族からなり、言語としてはクメール語やフランス語が用いられています。

今回私はカンボジアについての知識はほとんどない状態で入国しました。首都プノンペンに滞在したのですが、実際にプノンペンを訪れるまでは、首都とはいえそこまで発展しているわけではないであろうと思っていました。しかしながら、空港から宿泊するホテルへ移動する際に見た街の風景は、道路は未舗装な箇所も多く、空気が埃っぽくはありますが、高層ビルも点在し、多くの自動車やバイクタクシーが往来を行き交っており交通量も多く、発展途上の部分はあるものの、かなりの都会であると感じました（写真1、2）。カンボジアには日本の様な四季はなく、乾季と雨季に分かれます。8月のカンボジアは雨季にあたります。雨季といっても、一日中雨が降り続けるわけではなく、午後になると程強い雨が降り、1-2時間でやんでしまいます（写真3）。雨が降っていない時は気温

が高く日差しも強く、外出時にはタオルが手放せませんでした。



写真1 プノンペン市街地



写真2 トゥクトゥクというカンボジアのバイクタクシー



写真3 豪雨のプノンペン市街

2. カンボジア国における放射線デジタル技術普及事業

私が参加してきたプロジェクトについて概説したいと思います。厚生労働省「平成27年度医療技術等国際展開推進事業」とは、国立国際医療研究センターが厚生労働省からの委託で実施するODA事業であり、国立国際医療研究センター自体が実施主体となって実施するプロジェクト10件と、国立国際医療研修センターから事業を受託し別機関が実施主体となるプロジェクト16件の計26件のプロジェクトで構成されます。事業の大枠としては、日本の医療政策や社会保障制度等に見識を有する者の関係国への派遣及び研修の実施、諸外国の医療従事者や保健・医療政策関係者等の本邦受入、研修の実施の2つからなります。

カンボジア国における放射線デジタル技術普及事業は、この平成27年度医療技術等国際展開推進事業の一つで、株式会社ティーエーネットワークが事業受託機関となり、ユニカミノルタ株式会社と大分大学医学部放射線医学講座の協力のもと実施された事業になります。我が国においては既にX線画像診断のデジタル化は普及していますが、カンボジアではまだその途上あり、いまだ多くの医療施設のX線画像は液体现像で、高温多湿の環境も相まって画像の質の確保が難しく、カンボジアではデジタル放射線技術の普及が渴望されているというのが現状です。

今回の現地研修はカンボジアの公立病院の放射線科医と放射線技師を対象として、日本のデジタル放射線技術を普及させる目的で、2015年8月17日から28日の期間に首都プノンペンで行われました。大分大学医学部からは、中山晃一副技師長と私が現地研修の講師として派遣され、放射線科医15名、放射線技師15名の合計30名のカンボジア国研修生が参加し、10日間にわたり朝8時30分から、夕方の5時まで、密度の濃い日程で講義と

Oita University Faculty of Medicine KONICA MINOLTA INC.					
Time	Day 1	Day 2	Day 3	Day 4	Day 5
8:00-8:30	Registration				
8:30-10:00	Opening Ceremony/Presentation	Basic Digital Radiology 2 (CR)	Quality Control with SS	Image Adjustment	Interpretation of radiogram.2
10:00-10:30	Tea Break				
10:30-12:00	Basic Computer / Network	Basic Digital Radiology 3 (CR)	Image processing for Digital Radiology	Interpretation of radiogram 1	CR Useful Functions
12:00-12:30	Lunch Break				
13:30-15:00	Basic Digital Radiology 1 (Introduction of Oita University Hospital)	CR system / Basic Operation	Practice of CR Basic Operation2	Practice of CR Operation for radiologic interpretations1	Posttest / Questionnaire for Radiologist
15:00-15:30	Tea Break				
15:30-17:00	CR Exposure	Practice of CR Basic Operation1	CR Basic Image Adjustment	Practice of CR Operation for radiologic interpretations2	Discussion for future radiology Ceremony

表1 カンボジア国における放射線デジタル技術普及事業現地研修の日程表

実習が行われました(表1)。講義のパートを我々が、実習のパートをコニカミノルタ社が担当しました。

3. 研修の感想

カンボジアでは中山副技師長と私でそれぞれ放射線技師と放射線科医を対象に、デジタル放射線技術の基礎、概論、画像処理の基礎、読影方法基礎を中心とした講義を行わなければなりませんでしたが、求められた講義内容には、画像処理の基礎など、正直なところ私自身にとっても難しい内容も含まれており、研修の準備段階から中山副技師長には大変お世話になりました。

8月17日～21日が私の担当する放射線科医対象の研修であったので、お盆明け早々に

バンコク経由でプノンペン入りしました。すでにカンボジア入国されていたティーエーネットワークの担当者である金子さん、西嶋さんと市街地のレストランで食事をしながら研修についての打ち合わせを行い、1日あけていよいよ研修初日、カンボジア保健省長官をはじめとして多くの方が出席する盛大な開会セレモニーが催されたのちに研修が開始されました(写真4)。

カンボジアの公用語はクメール語で、医学教育はフランス語で行われていて、英語がそこまで普及しているわけではないということもあり、講義は我々が英語で話した内容を、通訳の方がクメール語に翻訳するという形で行われました。外国人を対象にして講義を行うのも私にとって初めての経験でしたので、大変緊張しましたが、カンボジアの研修生はいずれもまじめで、熱意にあふれており、講義のたびに質問やコメントが多数寄せられ、大変感激したことが昨日のことに様に思い出されます(写真5、6)、研修は大変密度の濃いものであり、私自身も大変充実した日々を送ることができました。

8月22日には中山副技師長も合流し、カンボジア放射線医学会・技師会との意見交換会が行われました(写真7-10)。そこで行われた議論では、1)カンボジアにおける更なる医療画像診断技術の向上のためには、中央



写真4 開会セレモニーの様子



写真5 研修風景1



写真6 研修風景2



写真7 意見交換会の様子1



写真8 意見交換会の様子2



写真9 意見交換会の様子3



写真10 意見交換会終了後の集合写真

並びに州レベルの病院における機材整備とそれを使う医療従事者の能力強化が必要である。2) 機材の老朽化及び最新の機材の不足という問題を解決する必要がある。3) デジ

タル機材を使いこなす医療画像関連の人材を輩出する教育制度・施設機材等の教育環境・カリキュラムの整備が必要である。4) 放射線量の管理の必要性について。個人の線量管理、

施設の安全管理、維持管理が必要である。といったことが今後解決すべき問題として挙げられ（特に放射線防護に関する関心は極めて高かった）、大変白熱した議論が行われました。

研修の期間中に空いた時間を利用して、カンボジアの公立病院をいくつか見学させていただきました（写真11、12）。プノンペン最大の公立病院であるカルメット病院を含め4施設程を訪問しましたが、いずれの施設も、超音波検査は盛んに行われており、超音波装置は新しそうなものも多く見受けられました。多くは中国からの寄付とのことで、この1年でカンボジア全体に200台の寄付があったとのことです。X線撮影装置は、一部に新しいものも見かけられるものの、多くが大変古いものでした。見学した施設は公立病院の中でも大きな病院という事もあって、デジ



写真10 病院見学(カルメット病院)



写真11 病院見学(クメールソビエト友好病院)

タルシステムの導入はされており、アナログシステムと混在している状況でした。高温多湿で設備的にも整っていないため、撮影されたX線フィルムの保管が問題であろうと考えていたのですが、実際にはそもそも撮影されたフィルムの保管は行われていないという事で（フィルムに含まれる銀を採取するため）、大変驚かされました。

5. カンボジアでの生活

カンボジアでの研修は大変密度が高く、毎日研修が終わるころにはくたくたになっていましたが、研修終了後にはティーエーネットワークやコニカミノルタの担当者の方と毎日の様に食事にでかけ、カンボジアの夜を楽しみました。カンボジア料理も美味しく、食事の面で困ることは全くありませんでしたが、地の料理の中には日頃食べられないものも含まれており新鮮でした（写真12）。帰国予定日前日の8月23日は市内を観光する時間があったので、プノンペン王宮やセントラルマーケットなどを散策することもできました（写真13、14）。研修生にかぎらず、滞在中に出会ったカンボジアの人々はみな陽気で温厚で大変楽しい時間を過ごすことができました。



写真12 ある日の夕食



写真13 プノンペン王宮

当初の予定では8月24日にカンボジアを
発つ予定でしたが、カンボジアを去るのが
つらいという私の想いが通じてか、九州を
台風が直撃し飛行機が運航休止となり、予定
よりも1日多くプノンペンに滞在することと
なったのも、よい思い出です。

6. おわりに

今回の研修参加、病院見学を通じて、カン

ボジア公立病院の放射線部門の現状について
感じた事は、使用されている装置にも古い
ものが多く、また放射線防護に関しても未整備
であり、多くの問題点や改善されるべき点を
有しているという事です。しかしながら、
放射線科医や放射線技師は、現状の問題点を
認識しており、放射線医学に関する教育や、
検査・治療を発展させたいという熱意を強く
感じました。

今回このようなプロジェクトに参加し、貴重
な経験をする事が出来た事を大変うれしく
思います。出発前後や現地滞在中に様々な
マネジメントをしてくださった、ティー
エーネットワークの西嶋さん、金子さん、
安食さん、研修の準備段階から大変お世話に
なった中山副技師長、コニカミノルタの担当
者の皆さま、そして診療や研究で多忙な中、
私をカンボジアへ快く送り出してくださった
森教授をはじめ大分大学放射線医学講座の
皆さまに御礼を申し上げて本稿を締めくり
たいと思います。



写真14 プノンペンセントラルマーケットにて

大分県JICA派遣専門家連絡会申し合わせ事項

(平成14年3月1日制定)

1. 趣 旨

わが国における開発途上国に対する国際協力活動の一層の拡充要請、九州及び大分県における国際交流活動の活発化、国際協力事業への参加志向の高まりが顕著な今日、開発途上国で国際協力活動の第一線に身を置いた共通体験を有する我々は、持てる知識・エネルギー等を集結して、前記の動向の有効な発展に質すると共に、県内の現居住地において我々の体験を活用する方途の具体化を期して、本会をここに結成する。

2. 事 業

本会は前項の趣旨の具現を図るため、下記に係る事業を行う。

- (1) 政府開発援助(ODA)の進展動向に関する調査研究および提言
- (2) JICA及びJICA九州国際センターの業務遂行の方途に関する助言、支援等
- (3) 大分県と海外諸国(特に発展途上国)との国際交流活動の促進、充実に質する諸活動
- (4) 会員相互の情報交換・交流・親睦に関すること。

3. 会 員

本会の趣旨に賛同するJICA派遣専門家経験者

なお、今後帰国し、当会に入会を希望する専門家は、当会に入会届を提出するものとする。

4. 会長及び幹事

- (1) 会の運営を円滑に行うため、当会に会長を1名置く。また、世話役として2名、会計役として1名、計3名の幹事を置く。
- (2) 会長は会務を総括し、会を代表する。
- (3) 幹事は適宜幹事会を開いて、所要の協議・決定を行い、会員の協力を得て、第2項に定める会務の執行に当たる。
- (4) 会長及び幹事の任期は2年とする。但し、再任は妨げない。
- (5) 本会は必要に応じ会計監査役2名を定めることとし、総会の議を経て会長が委嘱する。
- (6) 本会に事務局長及び編集責任者を定め、会長が委嘱する。

5. その他

この申し合わせ事項を改変し、もしくは新たに会則を設ける場合、幹事会が原案を策定し、総会の議を経て施行する。

以上

付 則

この申し合わせ事項は、平成19年2月2日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成20年2月6日に一部改定し施行する。

この申し合わせ事項は、平成25年2月1日に一部改定し施行する。

編集後記

本会報は会員の専門家のみならず国際協力をご経験の方々に広くご寄稿頂き、任地での国際協力の現状を会員の皆様で共有し、国際協力の今後を考えるきっかけとなるものと理解しております。これまでの編集責任者のご尽力によりまして、非常に充実した内容の冊子形式の会報の発刊が継続されています。本号におきましても、中村進先生からのニカラグアでの農業訓練、現JICAデスク大分の佐保様からのレイテ島での農業訓練、佐藤様からのバンラデシュでの清掃活動、株式会社清風庵の高野様からのフランスでオリーブオイルとの出会いから輸入販売まで、芸術文化短期大学の玉井先生からの大学における国際教育の現状、そして大学放射線科の高司先生からのカンボジアでの国際医学教育と、多種多様な職種、国々でのご活動の様子をご寄稿頂きました。内容を拝読させて頂きますと、それぞれのお立場で様々なご苦労を経験しつつも柔軟に適応し、どこか楽しんで過ごされていた様子が良く理解できます。異国（多くは途上国）での人々や文化とふれ合い、楽しみ、最終的に携わった事業での成果が得られ、それを実感できるというプロセスは、国際協力事業に参加する際の最大の醍醐味と言えらると思います。本誌での皆様の体験内容も、今後の国際協力を考える上で非常に参考となり、かつ刺激となる内容となっております。ご多忙中にもかかわらずご寄稿頂きました皆様には、この場をお借りしまして感謝申し上げます。

本誌の最後には、専門家連絡会事務局よりの申し合わせ事項を掲載しております。一昨年に一部改訂がなされておりますので、どうぞご確認ください。

最後になりましたが、本会報は皆様からの原稿により、冊子の体裁を維持し発刊されております。会員諸氏あるいは関係の皆様には今後も広く、随時原稿を募集いたしますので、専門家の派遣情報やご体験、あるいは関連のご経験やご意見をお持ちの方々は、下記までご連絡いただきますと幸いです。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

田上 秀一

大分県JICA派遣専門家連絡会会報編集責任者

連絡先：〒879-5593 大分県由布市挾間町医大ヶ丘1-1

大分大学医学部臨床医学系放射線医学講座

Tel : 097-586-5934, Fax : 097-586-0025

E-mail: stanoue@oita-u.ac.jp